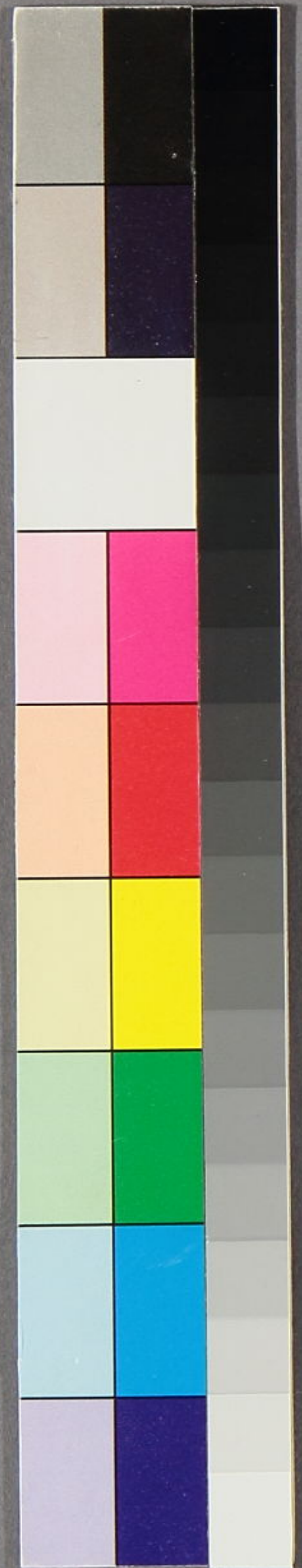


薰蕕錄

美

增
775
66



4
775
66
1
管
海
卷

董藕錄卷之四十一

目錄

式子內親王家集

小町家集

魚好家集



薰箱録卷之百二十三

中村直道輯



後白河院乃第之方皇女式子内親王女世宣の
母院と号す二條院たりけり皇秋の院乃丹後
宮内侍也すむれは院の中ももむれは
やゆきき前人好きことゆりけるその家集と
りしもの様よりらるるめて世濃齋といはれ
りしもの事なりけり朝より夕れも一りきき
に泉原の幽藪よりくはるる心ばけのうら
なむらかむらぬ月文靜中も思ふことし

ついでにあらはれしとてはなほのうらみありしをわづらひて
ついでにあらはれしとてはなほのうらみありしをわづらひて
ついでにあらはれしとてはなほのうらみありしをわづらひて
ついでにあらはれしとてはなほのうらみありしをわづらひて

旅

みやぎのあまのつとむるのこころをいふに
みやぎのあまのつとむるのこころをいふに
みやぎのあまのつとむるのこころをいふに
みやぎのあまのつとむるのこころをいふに

山家

おちよとてあまのつとむるのこころをいふに
おちよとてあまのつとむるのこころをいふに
おちよとてあまのつとむるのこころをいふに
おちよとてあまのつとむるのこころをいふに

鳥

ついでにあらはれしとてはなほのうらみありしをわづらひて
ついでにあらはれしとてはなほのうらみありしをわづらひて
ついでにあらはれしとてはなほのうらみありしをわづらひて
ついでにあらはれしとてはなほのうらみありしをわづらひて

祝

春のゆく世に松風はゆき市行ともくゆきあはれり
天のゆく世に松風はゆき市行ともくゆきあはれり
いとせういよきとくさか代は昔月夜にたてまらけり
かあはれのいつひうへふわきもさうゆきしけるあはれり
春よりひえくゆの川のさるれをうらひむき若ふさうはきふ
維入初獲不見ぬ集歌

二月の日はさうりうらまはゆきさ

ちりゆれはひゆりたてぬわらわりのたてゆき
かたはりのゆきさうりあはれりあはれり日ひあはれ
あはれゆきさうりゆきさうりあはれりあはれり

神楽のゆきさうりあはれりあはれりあはれり
歌あはれり

昔もあはれゆきさうりあはれりあはれり

百首のゆきさうりあはれりあはれり

うらたぬくさゆきさうりあはれりあはれり

百首歌のゆきさうりあはれりあはれり

うらたぬくさゆきさうりあはれりあはれり

百首のゆきさうりあはれりあはれり

神楽のゆきさうりあはれりあはれりあはれり

かたはりのゆきさうりあはれりあはれり

まはれりあはれりあはれりあはれり

侍のゆきさうりあはれりあはれり

かたはりのゆきさうりあはれりあはれり

百首のゆきさうりあはれりあはれり

権難といふをゆを

ゆかりをいふりつりて文もどねに月乃をけとまけ
家のみまゆらうとわきく惟明親とみゆつらりける
心もわりよれどこのさうらうひね風よりさねふ人の物
あつ

惟明親と

はくふねりゆらうあまてふはま橋とていひくさうさゆに
百首歌の中ふ

らうねくさうらうはねさうさゆにさゆ物あつしきとゆんらう
さうらうのさゆらう月星さうらうゆくさゆりたのさゆらうあま
夕まねゆきさうらうあまらうあつてゆくさゆらうさゆらう
百首歌の中ふ

さうらうのさゆらうあまてふはま橋とていひくさうさゆに

揚衣のつて

あつてゆきさうらうあまらうあつてゆきさうらうあつてゆき
さうらう

同をよみゆきさゆらうあつてゆきさうらうあつてゆきさゆらう
今らうさゆのあつてゆきさうらうあつてゆきさゆらう
百首歌の中ふ

いづれよ絶えなほさうらうあつてゆきさうらうあつてゆきさゆらう
あつてゆきさうらうあつてゆきさうらうあつてゆきさゆらう
まゆらうあつてゆきさうらう

あつてゆきさうらうあつてゆきさうらうあつてゆきさゆらう
密のさうらう

さうらうあつてゆきさうらうあつてゆきさうらうあつてゆきさゆらう

白雲のぼけしとくきく

月もさすまほしき山は みるはれさるるひにさるるたれぬ
七月のち明り江山より式月新主にとらぬ

惟明親王

あつちのちと何れかのぶとさけととさかあふゆあつた月
と一

さめのおのちのちとさかあふゆあつた月

後白河院がれぬくは百首歌

とれぬちのちとさかあふゆあつた月

百首歌

くささつたのちとさかあふゆあつた月

百首歌の中、毎日晨朝入法定りの歌

あつちのちと何れかのぶとさけととさかあふゆあつた月
とれぬちのちとさかあふゆあつた月

新うす

あつちのちと何れかのぶとさけととさかあふゆあつた月

あつちのちと何れかのぶとさけととさかあふゆあつた月

百首歌中小土無代受者の歌

あつちのちと何れかのぶとさけととさかあふゆあつた月

後宗被掳政大炊師ふとあつちのちと何れかのぶとさけととさかあふゆあつた月

あつちのちと何れかのぶとさけととさかあふゆあつた月

後宗被掳

あつちのちと何れかのぶとさけととさかあふゆあつた月

あつちのちと何れかのぶとさけととさかあふゆあつた月

新うらた

けしきも山田の秋のうらたうらたうらたうらたの秋のうらた

年の書りゆか

人うらたうらた外のゆかの中はまはまありうらたうらたうらた

忠徳

春ゆくとゆか春ゆくとゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆか

密の年のゆか

あつちりやゆか人ふ月うらたゆかゆかゆかゆかゆか

ゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆか

あつちりやゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆか

新うらた

新うらたうらたゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆか

人うらたゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆか

秋いさゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆか

あつちりやゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆか

遠去の年 新うらた

秋いさゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆか

水うらた

あつちりやゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆか

正法百首歌

あつちりやゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆか

ゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆか

正法二年百首歌

あつちりやゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆか

百首歌の中

花のよきはさきいとも歌うらうらうの結ぶ糸から

歌うらう

花のよきはさきいとも歌うらうらうの結ぶ糸から

歌うらうの中

花のよきはさきいとも歌うらうらうの結ぶ糸から

百首歌の中

花のよきはさきいとも歌うらうらうの結ぶ糸から

花のよきはさきいとも歌うらうらうの結ぶ糸から

歌うらう

花のよきはさきいとも歌うらうらうの結ぶ糸から

阿波歌集

花のよきはさきいとも歌うらうらうの結ぶ糸から

歌うらう

花のよきはさきいとも歌うらうらうの結ぶ糸から

百首歌の中

花のよきはさきいとも歌うらうらうの結ぶ糸から

花のよきはさきいとも歌うらうらうの結ぶ糸から

歌

花のよきはさきいとも歌うらうらうの結ぶ糸から

花のよきはさきいとも歌うらうらうの結ぶ糸から

花のよきはさきいとも歌うらうらうの結ぶ糸から

花のよきはさきいとも歌うらうらうの結ぶ糸から

秋風やかりをはざる女とれり言らうたまでゆく事凡

秋

うらみの秋の風吹くさうりめくす藤の秋のさく風凡
泣いたれば木葉の雨りふり月夜やしてこころの秋のさく風
目ざしし乃露もつれおのびふさふさおつす入あひのこ
泣のわらば秋夜平た信がれ露のさく藤の秋のさく風
秋夜好しの秋風おのびけさ音のわらふ秋のさく風
よせのつらさを秋夜すうさくつらさを秋のさく風
後春秋あき秋乃さくさくあきいささを秋のさく風と知ける
秋秋のさく風と知けるあき秋のさく風
秋あき秋のさく風と知けるあき秋のさく風
かり秋のさく風と知けるあき秋のさく風

正治百首歌をてしつりけること

あき秋のさく風と知けるあき秋のさく風
あき秋のさく風と知けるあき秋のさく風

涼系

あき秋のさく風と知けるあき秋のさく風

百首歌の中ふ

あき秋のさく風と知けるあき秋のさく風

正治百首歌小

あき秋のさく風と知けるあき秋のさく風

正治二年百首歌小

あき秋のさく風と知けるあき秋のさく風

あき秋のさく風と知けるあき秋のさく風

歌あらず

新千
こゝろにやうとてまはるる花は信成のちの男は成も
新千
秋のこゝろまはるる花は信成のちの男は成も
新千
秋のこゝろまはるる花は信成のちの男は成も
新千
秋のこゝろまはるる花は信成のちの男は成も

百首歌の中

新千
秋のこゝろまはるる花は信成のちの男は成も
新千
秋のこゝろまはるる花は信成のちの男は成も
新千
秋のこゝろまはるる花は信成のちの男は成も
新千
秋のこゝろまはるる花は信成のちの男は成も

新千
秋のこゝろまはるる花は信成のちの男は成も
新千
秋のこゝろまはるる花は信成のちの男は成も
新千
秋のこゝろまはるる花は信成のちの男は成も
新千
秋のこゝろまはるる花は信成のちの男は成も

天保七乙未年八月十三日

中村直道

式子内親之家集終

薰摘録巻し百二十

薰摘録巻し百二十

中村直道輯

小節小町家集

こゝろまはるる花は信成のちの男は成も

新千
秋のこゝろまはるる花は信成のちの男は成も
新千
秋のこゝろまはるる花は信成のちの男は成も
新千
秋のこゝろまはるる花は信成のちの男は成も
新千
秋のこゝろまはるる花は信成のちの男は成も

新千
秋のこゝろまはるる花は信成のちの男は成も
新千
秋のこゝろまはるる花は信成のちの男は成も
新千
秋のこゝろまはるる花は信成のちの男は成も
新千
秋のこゝろまはるる花は信成のちの男は成も

おおしりし人しを流舟きこころか

新千
秋のこゝろまはるる花は信成のちの男は成も
新千
秋のこゝろまはるる花は信成のちの男は成も
新千
秋のこゝろまはるる花は信成のちの男は成も
新千
秋のこゝろまはるる花は信成のちの男は成も

新抄

くまふあはるけりあまをらるる御まの舞を流さぬを

ついでに

あまをらるる御まの舞を流さぬを

あまをらるる御まの舞を流さぬを

あまをらるる御まの舞を流さぬを

あまをらるる御まの舞を流さぬを

あまをらるる御まの舞を流さぬを

あまをらるる御まの舞を流さぬを

あまをらるる御まの舞を流さぬを

あまをらるる御まの舞を流さぬを

あまをらるる御まの舞を流さぬを

あまをらるる御まの舞を流さぬを

あまをらるる御まの舞を流さぬを

あまをらるる御まの舞を流さぬを

あまをらるる御まの舞を流さぬを

あまをらるる御まの舞を流さぬを

あまをらるる御まの舞を流さぬを

あまをらるる御まの舞を流さぬを

あまをらるる御まの舞を流さぬを

あまをらるる御まの舞を流さぬを

あまをらるる御まの舞を流さぬを

あまをらるる御まの舞を流さぬを

あまをらるる御まの舞を流さぬを

あそねくしの葉とてかこつてさうらふ海なりと
山をいづのまじりて井にうかす中をいづるまじり

又他下 お首 北ねとてい

そらふまじりてさうらふ海なりとさうらふ海なりと
別つていづるまじりてさうらふ海なりと
あそねくしの葉とてかこつてさうらふ海なりと
あそねくしの葉とてかこつてさうらふ海なりと
あそねくしの葉とてかこつてさうらふ海なりと
あそねくしの葉とてかこつてさうらふ海なりと

小町茶葉上巻

小町茶葉上巻下

去るの茶葉をのこす小町茶葉といふは
や秋のゆふにさうらふ

あそねくしの葉とてかこつてさうらふ海なりと
あそねくしの葉とてかこつてさうらふ海なりと
あそねくしの葉とてかこつてさうらふ海なりと
あそねくしの葉とてかこつてさうらふ海なりと

小町茶葉上巻下

あそねくしの葉とてかこつてさうらふ海なりと
あそねくしの葉とてかこつてさうらふ海なりと
あそねくしの葉とてかこつてさうらふ海なりと
あそねくしの葉とてかこつてさうらふ海なりと
あそねくしの葉とてかこつてさうらふ海なりと
あそねくしの葉とてかこつてさうらふ海なりと


~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

業藕録巻二百六

天保六乙未年秋八月三日書寫之

中村萬喜直道

直道云予於歌學毫無所見峯之庵谷之窟保是德者  
之趣所本書散書而句之統難見三度而如當尚俟歌人  
之指揮云爾

薰菡錄卷之百之五

中村直道集

兼好法師家集と

石山よまふあつとて暖あふさうとあえ

あまのりなほれはれお坂を同海のこものあけおれ  
あまのりなほれはれお坂を同海のこものあけおれ  
あまのりなほれはれお坂を同海のこものあけおれ

あまのりなほれはれお坂を同海のこものあけおれ  
あまのりなほれはれお坂を同海のこものあけおれ  
あまのりなほれはれお坂を同海のこものあけおれ

あまのりなほれはれお坂を同海のこものあけおれ  
あまのりなほれはれお坂を同海のこものあけおれ  
あまのりなほれはれお坂を同海のこものあけおれ

七月廿日

あはれなるにせむとてわづらふもよこせむとてさだむとて  
腹をすく

まなこをのこすはてはなをいふとてさだむとてわづらふとて  
すくはれり

こころのなをいふとてさだむとてわづらふとてすくはれり  
まなこをのこすはてはなをいふとてさだむとてわづらふとて  
すくはれり

あはれなるにせむとてわづらふもよこせむとてさだむとて  
腹をすく

まなこをのこすはてはなをいふとてさだむとてわづらふとて  
すくはれり

こころのなをいふとてさだむとてわづらふとてすくはれり  
まなこをのこすはてはなをいふとてさだむとてわづらふとて  
すくはれり

あはれなるにせむとてわづらふもよこせむとてさだむとて  
腹をすく

まなこをのこすはてはなをいふとてさだむとてわづらふとて  
すくはれり

こころのなをいふとてさだむとてわづらふとてすくはれり  
まなこをのこすはてはなをいふとてさだむとてわづらふとて  
すくはれり

しんせい

ふ井川はくしんといふ物とすまはるはくしんといふ物  
小倉乃々の後あしきまのあしきま堂よりなまはるりして  
明の月白く曙の色しるをとりて  
まのうらな月影をかじすうらな  
おとあまのふか東にほくしんといふ  
まのうら

しんせい  
あしきまのあしきま  
しんせい

あしきまのあしきま  
あしきまのあしきま

しんせい

あしきまのあしきま  
あしきまのあしきま

あしきまのあしきま  
あしきまのあしきま

あしきまのあしきま  
あしきまのあしきま

あしきまのあしきま  
あしきまのあしきま

あしきまのあしきま  
あしきまのあしきま

と一ちしてのしりあひのむらうなるまぢきかたのくまひの  
九百廿五のつら

ちたちりあれたらまふかきうりまてかちのまぢきかたの  
中門入たつ網を踏進らの白あうりふたをたふまぢ  
那とさうりて分るひるま後まぢき

あていんあふくまぢきかたのまぢきかたのまぢきかたの  
月十九日教員ちまていんあふくまぢきかたのまぢきかたの  
まぢきかたのまぢきかたのまぢきかたのまぢきかたの  
まぢきかたのまぢきかたのまぢきかたのまぢきかたの

月十九日教員ちまていんあふくまぢきかたのまぢきかたの  
まぢきかたのまぢきかたのまぢきかたのまぢきかたの

まぢきかたのまぢきかたのまぢきかたのまぢきかたの

まぢきかたのまぢきかたのまぢきかたのまぢきかたの

まぢきかたのまぢきかたのまぢきかたのまぢきかたの  
まぢきかたのまぢきかたのまぢきかたのまぢきかたの

まぢきかたのまぢきかたのまぢきかたのまぢきかたの  
まぢきかたのまぢきかたのまぢきかたのまぢきかたの  
まぢきかたのまぢきかたのまぢきかたのまぢきかたの

まぢきかたのまぢきかたのまぢきかたのまぢきかたの  
まぢきかたのまぢきかたのまぢきかたのまぢきかたの

まぢきかたのまぢきかたのまぢきかたのまぢきかたの  
まぢきかたのまぢきかたのまぢきかたのまぢきかたの

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

山あつし木を焚く音もあつたのいふところの日はついでに  
 花の香  
 山あつし木を焚く音もあつたのいふところの日はついでに  
 花の香  
 山あつし木を焚く音もあつたのいふところの日はついでに  
 花の香  
 山あつし木を焚く音もあつたのいふところの日はついでに  
 花の香

山あつし木を焚く音もあつたのいふところの日はついでに  
 花の香  
 山あつし木を焚く音もあつたのいふところの日はついでに  
 花の香  
 山あつし木を焚く音もあつたのいふところの日はついでに  
 花の香  
 山あつし木を焚く音もあつたのいふところの日はついでに  
 花の香











細き糸を紡ぎて作らるるものなり  
枝はひらきわたりてまをせしむるなり  
るものなり  
昔はしるすものなり

一

正申二年春三月一日  
ふゆむ

一

きよくもくものちかきなり  
り  
民部CANの及ぶなり  
あり

きよくものちかきなり

若水

はらばらななり

早蕨

今

帰馬

るものなり

盤丸

あり

初節

あり

九月





一、  
一、  
一、  
一、

海

物

舟

五

一

一

一

一

一

一

一

一

一

一

一

一

一

一

一

一

一



正月十二日 登川の舟に乘り庚申

不春書

年々此の如くは世はいつてもあつたけりけるは  
初用書

こゝへはあつたけりけるはいつてもあつたけりけるは  
作別書

あつたけりけるはいつてもあつたけりけるはいつてもあつたけりけるは  
夕旅行

あつたけりけるはいつてもあつたけりけるはいつてもあつたけりけるは  
弁辨記

あつたけりけるはいつてもあつたけりけるはいつてもあつたけりけるは  
是坊の舟に坐りて

二年 庚申

林の舟に坐りていつてもあつたけりけるはいつてもあつたけりけるは  
あつたけりけるはいつてもあつたけりけるはいつてもあつたけりけるは  
あつたけりけるはいつてもあつたけりけるはいつてもあつたけりけるは  
あつたけりけるはいつてもあつたけりけるはいつてもあつたけりけるは  
あつたけりけるはいつてもあつたけりけるはいつてもあつたけりけるは  
あつたけりけるはいつてもあつたけりけるはいつてもあつたけりけるは  
あつたけりけるはいつてもあつたけりけるはいつてもあつたけりけるは  
あつたけりけるはいつてもあつたけりけるはいつてもあつたけりけるは

あつたけりけるはいつてもあつたけりけるはいつてもあつたけりけるは  
あつたけりけるはいつてもあつたけりけるはいつてもあつたけりけるは  
あつたけりけるはいつてもあつたけりけるはいつてもあつたけりけるは  
あつたけりけるはいつてもあつたけりけるはいつてもあつたけりけるは  
あつたけりけるはいつてもあつたけりけるはいつてもあつたけりけるは  
あつたけりけるはいつてもあつたけりけるはいつてもあつたけりけるは  
あつたけりけるはいつてもあつたけりけるはいつてもあつたけりけるは  
あつたけりけるはいつてもあつたけりけるはいつてもあつたけりけるは

あつたけりけるはいつてもあつたけりけるはいつてもあつたけりけるは  
あつたけりけるはいつてもあつたけりけるはいつてもあつたけりけるは



大覺者のなるをいひてくさるゝ  
りしはくさるゝくさるゝくさるゝ  
くさるゝくさるゝくさるゝ  
くさるゝ

くさるゝくさるゝくさるゝくさるゝ  
水さる

くさるゝくさるゝくさるゝくさるゝ  
くさるゝくさるゝくさるゝ  
くさるゝ

くさるゝくさるゝくさるゝくさるゝ  
くさるゝくさるゝくさるゝ

くさるゝくさるゝくさるゝくさるゝ

海くさるゝ

くさるゝくさるゝくさるゝくさるゝ  
くさるゝ

くさるゝくさるゝくさるゝくさるゝ

兼好法師一家集下

猶とのらあしんぬ

ちよひはなはたすめむけをよそはてしやまてかきつり  
たひつりふく

たひつりふく

はらへん

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

鏡のうらゝ 随波功法 世俗不空 固如冰沫 泡炎  
うねるうらゝ 水の流の波をたす 世にこのまじ  
基礎をたえ 徳をたえ 徳のうらゝ

懐旧

あさくらのあさくけ ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり  
月ととて

あさくらのあさくけ ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり

あさくらのあさくけ ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり

あさくらのあさくけ ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり

菩提樹院のちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり

あさくらのあさくけ ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり

あさくらのあさくけ ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり

あさくらのあさくけ ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり

あさくらのあさくけ ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり

遍智院のちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり



Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 12 lines of dense cursive writing.

Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 12 lines of dense cursive writing.

かゝるに於ては、  
あ

此の如きもの  
あ

此の如きもの  
あ

此の如きもの  
あ

此の如きもの  
あ

此の如きもの  
あ

此の如きもの  
あ

此の如きもの  
あ

此の如きもの  
あ

此の如きもの  
あ

此の如きもの  
あ

此の如きもの  
あ

此の如きもの  
あ

かゝるに於ては、  
あ

此の如きもの  
あ

此の如きもの  
あ

此の如きもの  
あ

此の如きもの  
あ

此の如きもの  
あ

此の如きもの  
あ

此の如きもの  
あ

此の如きもの  
あ

此の如きもの  
あ

此の如きもの  
あ

此の如きもの  
あ

此の如きもの  
あ





ひとりもくものたふさぬ心ゆくことごとく

冷泉の太納言とて命は

ふ草

ありつゝのまはるきはなほせん世はまたぬちのさかしき

不遑意

昔一せむけのまほひのしめぬあやふきはらふは

速懷

さすねのまはるきくはるきくはるきくはるきくはるきく

沖子九志中納言家平命

依花待友

まほひのまはるきくはるきくはるきくはるきくはるきく

折木逢意

さすねのまはるきくはるきくはるきくはるきくはるきく

第一草意

まほひのまはるきくはるきくはるきくはるきくはるきく

七

まほひのまはるきくはるきくはるきくはるきくはるきく

折

まほひのまはるきくはるきくはるきくはるきくはるきく

七

晴天雨局の中懐四

まほひのまはるきくはるきくはるきくはるきくはるきく

まほひのまはるきくはるきくはるきくはるきくはるきく

兼光親王 西林院乃高七郎

一に五月日

あはれしむるはよきとてさすは花のよきとてしむるは花  
青蓮院二品親王より花并に春より車とよ  
まきしむるはよきとて

くはれしむるはよきとてさすは花のよきとてしむるは花  
あはれしむるはよきとてさすは花のよきとてしむるは花

くはれしむるはよきとてさすは花のよきとてしむるは花  
あはれしむるはよきとてさすは花のよきとてしむるは花

くはれしむるはよきとてさすは花のよきとてしむるは花  
あはれしむるはよきとてさすは花のよきとてしむるは花

くはれしむるはよきとてさすは花のよきとてしむるは花  
あはれしむるはよきとてさすは花のよきとてしむるは花

むらりあてなひ

花はあめをうせいのまうらふは花のよきとてしむるは花  
あはれしむるはよきとてさすは花のよきとてしむるは花  
あはれしむるはよきとてさすは花のよきとてしむるは花  
あはれしむるはよきとてさすは花のよきとてしむるは花  
あはれしむるはよきとてさすは花のよきとてしむるは花

あはれしむるはよきとてさすは花のよきとてしむるは花  
あはれしむるはよきとてさすは花のよきとてしむるは花  
あはれしむるはよきとてさすは花のよきとてしむるは花  
あはれしむるはよきとてさすは花のよきとてしむるは花  
あはれしむるはよきとてさすは花のよきとてしむるは花

絶絶

よきものいふはさきと云ひしりしりおすもさきと申れ

懐旧

ふらふらとておぼえぬことりかたきおぼえぬことりかたきおぼえぬことり

お鳥

和音ありしは公代の後り漢ありとてさすたるぬ言と申れ

綱代

ありせよとれは同則綱代守むとてさす身よりさす

病葉

うらさとの若るは枯もあつたさすさすさすさすさすさす

去りは哀傷

まひりのあつたさすさすさすさすさすさすさすさす

さすさすさすさすさすさすさすさすさすさすさすさす

かたはらにふらふらとてさすさすさすさすさすさす

いづれものい

写本云

此一冊者兼好法師自撰家集草本欽  
而彼集不流布于世如今幸覽之云秀  
評云能書奇觀何者如之不堪感悅聊  
誌之

寛永中三曆初秋上旬

長秋負外監通村判

此一冊者右以中院前內府通村公自筆之本  
本字之墨或假名遣隨寫本而已

家集文

詩負事

不可定之多少隨意

或十古首或七百九

十首三百餘首等

思心之

長哥連哥亦相交贈答勿論也又非贈  
答他人詩隨便多書載之

部立事

全不可有之強有分部人不可然其心  
者也

卷頭

本部立之上者可任心急難等又林冬  
勿論也

哀傷哥事

自卷以中十丑番書之忠岑集如此

詞事

如日記物語亦長書續又哥合判詞是  
非故實亦以次書其才覺常交也  
已上得此意可書之

喜あつるよりこむくひ人の精よるる

まてとてあま

らちもくれを河もすまゐるらりり  
うさい舟りむむ林のさうりせ

ト部兼好以倭語聞然其所作徒  
然草遍行於世而家集罕傳其或  
載撰集或偶落人間者皆吟誦以  
爲口實近頃詠草一帖幸出故内  
相源通村公曾跋其末以爲之證  
洛之書肆時元索搜之欲鏤梓而  
乞一語倭語非余所知然有内相

之跋則知其不贗且余先考羅  
山子愛其為人奇其倭語為之  
露抄則余於兼好不能以尋常  
評人視焉想夫彼一生之詠豈  
是而已哉蓋以韜晦之士故其  
所吟亦共散逸而此一帖其泰  
山之毫芒乎在好倭語者則崑

山之片玉乎於是戲時元曰此  
是片玉汝沽哉沽哉胡盧亂道  
遣焉  
寬文甲辰之夏

弘文院林學士

洛陽今出川

林和泉掾板行

天保六年乙未秋八月廿一日  
於詫磨郡田迎村犬追物所  
書寫之中村萬喜直衛

薰菑錄百二十五終

薰菑錄卷之四十五終



